

アジ研の思い出

石川 滋

私にとってアジア経済研究所のもっとも大きな思い出は、その創立期からほぼ15年間にわたって、アジ研の若い人々と一緒になって進めた研究会のそれである。主なものは二つ。その一つは、『中国経済発展の統計的研究』のシリーズ3冊と『中国経済の長期展望』のシリーズ6冊の形で成果をまとめた中国にかんする研究会であり、他はアジア諸国に登場した“緑の革命”にかんする研究会で、この方は『アジア開発のメカニズム 農業編』などにまとめられている。

中国の研究会についてだけ述べると、当時われわれが課題としたのは、何よりもまず、1950年代にまとまって公表された政府統計をより所として、国民所得の回転と成長の姿をできるだけきちんと掴むこと、その上で国民経済の各部門および各局面の状態と問題についての知識を積み重ねることであった。前者は『統計的研究』で一まず終えた。『長期展望』では主に後者を扱ったが、当時すでに公表統計はほぼ皆無の時代に入っていて、推計方法や定性的判断に苦労があった。それは10年かかった。最後の展望は半ば仮定的数値を用い、“仮説的展望”と名付けて発表した。経済情報は今日使いかねるほど豊かになったが、今からみて大きい誤りは犯していなかったと思う。

このような気長な研究会をもてたことは、故東畑精一先生を始めアジ研首脳部の寛容の精神によるところで、感謝にたえない。いまは故人となった尾上悦三君をふくめて、中国経済研究に入ったばかりの若い人々も、つよい忍耐を發揮した。統計データ不足の条件の下でのこの研究会の課題への取り組みは苦しかったことと思われる。しかしある一国の国民経済の研究をこのようなアプローチで始めることは、統計データが充分であろうとなかろうとベーシックであり、経済政策や体制改革の研究もそれを土台としてはじめて有効だと思うが、どうであろうか。

(青山学院大学教授)

アジ研と私

香 西 泰

アジア経済研究所は30周年を迎えられた。心からお祝い申しあげたい。

祝辞を述べる柄でもないのですが、アジア経済研究所と私のこれまでのお付き合いを回顧させていただく。アジ研の命名はつとに承知していたが、直接ご縁ができたのは1983年だと思うが、篠原所長、小林理事（いずれも当時）からのお許しで、アジ研に席を頂き、週1回通って、所内の研究会などに参加させていただいたときである。当時私は経済企画庁から東京工業大学に移籍したばかりで、新分野に参入したいという希望をもっていた。アジアのことも考えてみたいテーマの一つであったわけである。もっとも、アジ研にしてみると専門家が山ほどいて、素人の口をだすべき分野でないことがよくわかった。それでも何人かの研究者とお近付きになれたのは、幸せだった。学校で事務的な仕事の順番が回ってきたので、1年で通うのを止めてしまったのは残念である。

その後、日本経済研究センターに移って、シンク・タンクという点ではご同業のはしくれになった。その時考えたのはアジ研を見習うことだけはしないということだ。規模の経済、範囲の経済、どちらをとってもまことに勝負になるわけがない。そこをなんとかサバイブするにはどうすればよいか。私にとって最大の課題だが、それを考えれば考えるほど、アジ研の学風に敬意を深くする。

もう一つ、英文誌の編集委員の末席をけがしている。非専門家だから論文の割当ては少なくすみ、諸先生諸先輩の警咳に接するのをひそかな個人的利得にさせていただいている。

アジ研一層のご発展をお祈りしたい。

（日本経済研究センター理事長）

アジア研の思い出

永井道雄

この文章を書くにあたって、最初に申しあげたいのは、アジア研が30年にわたって歩みつづけ、見事に初志を貫かれたことに対する祝意と敬意である。

私は1970年代、故東畑精一先生のお勤めによって、*The Developing Economies* の編集委員の一人となり、80年代のはじめまで、この仕事をつとめさせていただいた。この間、国連大学の武者小路公秀副学長と共にアジア研に赴き、武者小路氏が計画しておられた「日本の経験」のプロジェクトに力を貸していただいた。このプロジェクトをめぐって、アジア研の林武先生を中心とするグループの方々と意見を交換する機会にも恵まれた。私の方が少しでもアジア研に貢献したというより、一方的な受益者であった。心から御礼を申上げる。

アジア研の30年については、英文の研究誌 *The Developing Economies* についての理解を通して考えを述べさせていただきたい。この英文誌は日本人と外国人の別なく論文を発表できるという点で、「国際的」であるが、同時に「学際的」であり、この点がまず大多数の学界誌と異なる点である。

具体的にいうと、発展途上国の発展を経済学的な観点から取りあげるだけでなく、政治学、社会学、歴史学などの立場から社会変化を扱うという幅広い立場をとっている。地域としては、はじめアジアに限定していたのが、アフリカなど他の地域をふくむ世界システムを取りあげていること、そのほかに、日本の諸問題を世界的な関心という角度からとりあげ、しかも英文で書かれているために、国際的に検討することができるという利点を持っている。日本の学界が世界の学界と手を結んで発展してゆくことが年ごとに必要になってゆきつつある今日、アジア研が発足以来、30年の業績と精神を基盤に一層の発展をとげられることを心から期待している。

(国連大学特別顧問・国際文化会館理事長)

アジア研創成期の一齣

山 本 登

それは昭和26年（1951年）秋のある日のことであったと記憶する。三田の慶大の研究室に藤崎信幸氏が私を訪ねてきた。この時が初対面であったが、昭和11年の文学部国文科卒業と聞いて、1年後輩だと思った。その時の用件は、元慶大教授でありまた戦時中は慶大亜細亜研究所（戦後に解散）の所長でもあった加田哲二氏を中心とするアジア問題調査会を設立するにつき、協力して欲しいとの要請であった。私にとって加田氏は尊敬に値する先輩であったので二つ返事で承諾した。程経て銀座の交詢社で加田氏にお会いしたが、アジア問題調査会（当時事務所は銀座7-5 弥生館ビル）は細々ながら活動を開始しており、講演会の開催や謄写版刷りではあったが「アジア問題」と題するレポートを刊行していた。そして加田氏から調査会の研究活動を拡充・強化するために私と同時代位の研究者を何人か集めて欲しいと依頼された。私は迷うことなく一橋大の板垣與一氏、東大の川野重任氏のお二人に協力をお願いし快諾を得た。このお二人とは戦前に成立した「大日本拓殖学会」で共に活動した気心の知れた仲間であったからである。

その間、藤崎氏は在満時代の縁故を利用して、手広く官・政・財界に知己を需めて調査会の資金造りと組織化に奔走していた様である。彼の企画力と組織力は独特のものがああり、こうした領域での智識に疎い私にとっては、正に驚異であった。

アジア問題調査会は正式には昭和26年12月に創立総会を開いたが、翌年夏に私は西独キール大学世界経済研究所への研究留学が決定したので、調査会の後事を板垣・川野の両氏に託して離日した。そして昭和30年4月、西ドイツでの2年余りの留学生生活を終って帰国すると、その間に調査会はアジア協会に発展的解消を遂げており、藤崎氏はその研究調査部長として、月刊『アジア問題』の本格的刊行のみならず数冊のアジア関係の文献の出版を統括していた。しかもこのアジア協会ををいわば母胎として、さらに本格的な高級

研究機関としてのアジア経済研究所の設立構想へと展開してゆくのであるが、あの銀座裏の一調査会が世界に誇る大研究機関の濫觴であったか考えると、アジ研特殊法人化30周年と聞いて正しく今昔の念に堪えない。

(慶應義塾大学名誉教授)